

第1回 伊方町総合教育会議議事録

【日時】 令和5年10月24日(火) 15:00~16:40

【場所】 伊方町役場 3階 会議室

【次第】

1. 開会	2
2. 町長あいさつ	2
3. 教育長あいさつ	2
4. 議題	
(1) 伊方町教育振興に関する大綱について	3
(2) その他	5
5. 閉会	17

【構成員】 伊方町長 高門清彦

伊方町教育委員会

教育長 中井雄治

教育長職務代理者 阿部勇二

教育委員 道元 平

教育委員 藤川美喜

教育委員 西村美重

教育委員 行天雅史

【事務局】 町長部局

濱松副町長、谷村総合政策課長、他担当職員3名

教育委員会事務局

阿部事務局長、他担当職員5名

【傍聴者】 なし

1. 開会

(谷村総合政策課長)

ただいまから、令和5年度第1回伊方町総合教育会議を開催いたします。
開会に当たりまして、高門町長からご挨拶を申し上げます。

2. 町長あいさつ

(高門町長)

皆様こんにちは。

本日は大変ご多忙のところ、伊方町総合教育会議ということで御指導をいただくこと、心から感謝を申し上げます。教育行政につきまして、皆様方には日頃から大変お世話になっております。町内ではご存知の通り、学校再編ということで、町民の皆様方、また保護者の皆様方を含め、非常に大きな関心が寄せられているところでございますので、教育委員の皆様方のもとにも様々な意見が届いているものと思います。どういった道を選択していくのかという事が、伊方町にとりまして一つの大きな今後の課題になってくると思っておりますので、今後ともご指導、ご協力をお願い申し上げたいと思います。

町政のほうも、前を向いて進めようと努力をしているところでございます。ご承知の通り、三崎支所の建物内にIT企業が入り営業を開始いたしました。この12月には水ヶ浦小学校の跡地に、コールセンターが営業を開始するというところで、現在、準備を進めているところでございます。8月には皆様方のご尽力もいただいて佐田岬半島ミュージアムがオープンし、現在のところ、順調な滑り出しをしていると思っております。

さらに温泉施設は、年末年始頃に徐々にオープンしていくということで、工事が進んでおりますし、それに伴って亀ヶ池の浄化を行うということで、事業者への作業の発注が終わりました。12月ぐらいから機械を入れ、攪拌をして徐々に外海に流すことで、浄化をするという手法でトライしてみようと思っておりますのでございます。

本日は様々な教育問題はもとより、町政全般について、皆様方のご意見を賜って、我々の参考にさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。ご挨拶にかえさせていただきます。

3. 教育長あいさつ

(谷村総合政策課長)

ありがとうございました。

続きまして、中井教育長からご挨拶をお願いいたします。

(中井教育長)

皆様、総合教育会議へのご参加ありがとうございます。

ご承知のように、新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を非常に制限してまいりましたが、この5月に制限が緩和され日常の生活が戻っております。しかしながら、現在の社会情勢に目を向けますと、様々な紛争や戦争が私たちの生活にも暗い影を落としており、教育についても貧困等、色々な影響を与えているところでございます。

伊方町におきましては、人口減少、少子化が顕著になり、学校の小規模校化、子

どもたちの学校教育環境をどうしていくのかという諸問題がありまして、様々な検討を重ねた結果、この12月に学校再編計画が策定される運びになっております。

また、学力の向上、ICT教育、グローバル教育、ふるさと教育の推進、不登校対応や、部活動の地域移行、社会教育、社会体育活動の活性化、文化活動の振興等、教育課題が山積している状況にあります。先ほど町長も述べられましたが、今年の8月にオープンしました佐田岬半島ミュージアムにつきましても、今後の円滑な運営を考えていかなければならないところでございます。

この総合教育会議につきましても、町長と教育委員会が意思の疎通を図り、町民の皆様の声を反映して、伊方町の教育の課題や、あるべき姿を共有することを目的とした、伊方町の教育にとって大変重要な会議であります。協議を深め、町長の考えと、伊方町教育委員会の方針を一致させ、子どもたちの教育や町民の皆様の生涯学習について、よりよい方向を目指していければと思っております。

今後の伊方町の教育行政に、今日の会議の結果をしっかりと反映させていきたいと思っております。皆様には、忌憚のないご意見を賜りますよう、お願い申し上げます。

(谷村総合政策課長)

ありがとうございました。

会議の進行につきましては、私、総合政策課長の谷村が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

4. 議題

(1) 伊方町教育振興に関する大綱について

(谷村総合政策課長)

それではまず、議題1の「伊方町教育振興に関する大綱について」、この件につきまして教育委員会事務局から説明を願います。

(阿部教育委員会事務局長)

大綱の施策の方針に沿った、現在の教育関係の取組についてご説明をさせていただきます。

お手元の資料「伊方町教育振興に関する大綱」3ページに4つの方針がございますが、この方針に基づきご説明いたします。

まず、方針1の「学校教育の充実」に関しましては、長期間にわたり様々な社会活動そして教育活動にも多大な影響を与えてきた新型コロナウイルス感染症が、本年5月に5類感染症へと移行されたことに伴い、引き続き感染対策に十分な注意を払いつつ、学校教育に関して様々な活動を再開しております。このコロナ禍で学んだ反省点を生かしつつ、ポストコロナの試行錯誤を続けているところでございます。

現在、伊方町では人口減少対策を最優先事項として、様々な施策に取り組んでおりますが、子育て支援の強化、教育環境の充実も重要な施策に位置づけられておりまして、新たな施策として、本年度より給食費の半額補助が開始されております。

生きる力の育成ということで英語力の向上を目指しており、各公民館では英語教室も開催しております。

情報教育につきましては、昨年度、全小学校のタブレット端末が導入から7年近

く経過しており、故障頻度も上がっておりましたので更新を行っております。加えて、タイピングの習熟のためにキーボードを購入し、1人1台、配備しております。小学生のプログラミング学習の入口に適したハードウェアを各小学校に配備し、プログラミング授業にも着手しております。

また、町内小中学校の再編につきましては、本年5月に伊方町学校再編検討委員会による検討結果がまとめられ、その後、教育委員会が作成した再編計画案を、説明し意見を求めるための保護者向け住民向けの説明会を開催いたしました。現在、計画策定の最終段階に入っております。

次に方針2の「生涯学習・生涯スポーツの活性化」に関してでございます。

本年度は、コロナ禍で中止や縮小を余儀なくされていた各種事業が再開されており、レッドウィング市との交流事業及び、新規事業である高校生の海外派遣留学等、海外との交流に関する事業についても実施することができまして、今夜、参加者による報告会が開催される予定となっております。

また、昨年度から伊方町出身の俳人坪内稔典先生に最終選者として御協力いただき、佐田岬投句事業を開始しておりますが、初回より非常にレベルの高い応募が多数ありまして、町内に俳句文化を根づかせようとしているところでございます。

スポーツの分野におきましては、3年間延期されていた佐田岬マラソン第10回記念大会が11月12日に開催される予定で、現在準備を進めております。

昨年リハーサル大会を実施したねんりんピック愛顔のえひめ2023につきまして、今週末の10月29日に実施される予定となっております。

それから、岡山シーガルズを招いてのバレーボール教室が8月に、プロバスケットチーム、オレンジバイキングスの公式戦につきましては、先日2日間、土日に開催されているところでございます。

次に方針3の「伝統・文化の継承と発展」に関しましては、佐田岬半島の伝統文化と文化財を守りながら、地域の魅力づくりにつながる活動を継続しておりますが、その核となる施設「伊方町文化交流施設 佐田岬半島ミュージアム」が8月にオープンとなり、順調な滑り出しを見せております。各地区の伝統行事の中には、コロナ禍により途絶えてしまいそうなものもあることから、可能な限り記録に残すべく、学芸員が調査に奔走するとともに、SNS等での発信を随時行っております。

また、各文化祭につきましても、コロナ禍で中止を余儀なくされましたが、本年度は実施の予定で、各公民館で準備が進められております。ただ、残念ながら展示のみの実施となったものもあることから、来年度に向けて、文化活動が再び活発化するよう取り組んでまいります。

そして国の天然記念物の三崎のアコウに関しましては、佐田岬はなはなを訪れた観光客が立ち寄ることが多いため、そのそばに休憩スペースを整備し天然記念物の観光価値の強化について試行しているところでございます。

最後に方針4の「信頼と協働で創る、全員参加のまちづくり」に関しましては、各地区開催を自粛しておりました、地区別人権同和教育懇談会につきまして、開催を呼びかけたところ、今年度は総会と抱き合わせの開催等、これまでとは違った形での実施を含め、開催が再開されているところでございます。ただし、まだ再開に踏み切らない地区も見られることから、今後も実施を呼びかけてまいります。

人権フェスタ2023につきましては、12月10日に、今年度も開催の予定で準備を進めております。

駆け足になりましたが、説明は以上でございます。よろしく願いいたします。

(2) その他

(谷村総合政策課長)

ただいま、教育委員会事務局から、伊方町教育振興に関する大綱につきまして施策の方針等の説明がありました。この大綱に基づいて、いかに本町の教育の充実を図っていくかについて、意見交換に移りたいと思います。ここからは自由な意見交換の形で進めていただければと思います。

どなたからでも結構でございますのでご意見、ご提言、ご要望等ございましたら、ご発言をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○阿部職務代理

私たちが、現在一番、考えなければならない、取り組まなければならないのは、学校再編かと思っております。

私は、現在までの地域説明会や保護者説明会の全てに出席しました。そこで生の保護者や住民の声を聞いた中で、一番実感として感じた事が、皆さんこの計画に理解を示していただいているということです。これはこの計画案の段階に持つていくまでに、たくさんの方が真剣に議論していただいた結果かと思っております。

説明会の意見交換では「子どもがこれだけ少ないのだからどうしようもない」「学校がなくなることで家庭から学校が遠くなることは非常に残念だけど仕方がない」という意見が多かったかと思っております。その中で、こうなるまでに手を打てなかったのか、と言う方がいましたが、町はこんなことやあんなこともやりましたよ、と答えると、そんなことやっていたのは知らなかった、という方が結構多かったと思っております。まちづくりについて、町の色々な取り組みや支援があっても、知らない人にとっては「何もやっていない行政」「行政は何やっているんだ」という事になるのかと思っております。

それから、今は近いところに学校があるので、そこで学童保育を受けているが、それがなくなると学校が遠くなって迎えに行くのも大変になるというような事や、学校跡地の事等、再編した後についての意見、質問が具体的に出ました。

再編後のことが結構出てきています。学童保育は教育委員会とは所管が違うので、今それを議論する段階ではないかもしれませんが、送迎であるとか、統合された後の学校跡地に学童保育の場を用意するのかという質問などがたくさんありましたことを、この場でお伝えいたします。保護者の立場に立った配慮を考えていただきたいと思っております。

○高門町長

やはり統合される側としては、そういう意見が強いと思います。決まる前に色々言うわけにいかないのです、決まった後で間髪を入れずに、こういうことで配慮します、と言える体制を整えておきたいと思っております。通学の方法も一つでしょうし、その学童保育の問題も、その辺は見直していきたいと思っております。

どうしても空き校舎というのは出てきます。企業の呼び込みといっても、難しい面はありますので、その辺の努力は続けていかなければいけません、どうすればよいのかというのはまた、教育委員の皆様を初め、町民の皆様の知恵も借りてやっていきたいと思っております。町として、その辺のところも頭に置きながらやってまいります。

○阿部職務代理

今の段階で出せる方針は少ないと思います。私たちは直近の課題で取り組んで、会議を開き色々検討したのですが、それに対して、町の意見があろうかと思いません。先ほどの件も横の連携になりますが、学童保育は課が違くと教育委員会が切捨ててしまうと、保護者としたら残念という話になるので、私たちも取り組んでいますよという誠意はお伝えしたいと思います。

○中井教育長

再編後の学童保育を、例えば九町に置くのがいいのか、伊方に置くほうがいいのか、色々な考え方がありますので、その辺はまた検討していかなければいけません。町長が言うように、やはり計画が決まれば、諸々の方針をセットですぐに打ち出せるように、所管が違って連携はしっかりとって考えていきたいと思っております。

○阿部職務代理

保護者の意見を聞いて、統合が予定される九町、三机、大久小があるところで、学童の子どもを受け入れるのか、再編された統合先の学童に入れるのか。また、学童は保護者が迎えに行くのですが、スクールバス的なもので送って帰るという事が可能なのか、バスが出せるのなら出してほしいという意見もありました。その辺が1番気になっていたのかなという印象です。

○藤川教育委員

先ほど、阿部委員のほうからも出ましたが、やはり再編は地区民の方にとって、非常に関心のある事だなと感じました。特に学校がなくなる地域の方が、防災拠点である学校がなくなって、自分たちの避難する場も確保できないのかという事は、説明会前にも耳に入ってきていましたし、子どもたちのために再編は仕方ないが、防災面でどうなのかという意見は、再編検討委員会の時にも出ていました。それについて、町の考えがあればお聞かせください。

○阿部教育委員会事務局長

今、お手元に「伊方町の避難所について」という、伊方町地域防災計画の中で定められた、避難所の一覧の資料をお配りしております。ここでは現在も廃校になった施設等の体育館も避難所に指定されております。

○谷村総合政策課長

学校が無くなるからといって、避難所も無くすというわけにはいきません。

○藤川教育委員

使わない建物は傷みが早いのですが、管理は町が定期的にするという事ですか。

○中井教育長

二名津小学校跡は、電気、トイレがなく、備蓄品は置いているような状況で、水ヶ浦小跡はトイレも電気もついていますし、備蓄もあります。場所によって違います。二名津の場合は、元中学校がありますからそちらは、トイレも電気もグラウン

ドも整備されています。津波対応のときは小学校ですが、それ以外のときは中学校で対応できるということです。

○谷村総合政策課長

備蓄品は自主防災に任せているものもありますが、町が管理している指定避難所に置いてあるものもあります。

○藤川教育委員

実際に何かあったときに、電気や水道等の環境は確実にあってほしいと思います。跡地利用は今後考えていく事かと思いますが、ここは確実に確保できるという事が言えれば、住民は心強いだらうと感じました。

もう一つは、去年意見が出たと思いますが、認定こども園についてです。管轄が違うといえればそれはそうなのですが、どの程度の連携をイメージしているかご教示いただければと思います。

○濱松副町長

今、保育所の再編検討委員会が設置され検討しております。そこで認定こども園、いわゆる幼保一体についても検討をするということにしております。現在のところ、会議を1回開催してそのあと現地調査を行った、という段階ですので、2回3回と検討委員会が進み、具体化していきたいと思っています。ただ、どの場所におくのか等、具体的な部分については、まだこれから検討委員会で議論をしていただくという段階です。

○行天教育委員

私には中学生と高校生の子どもがいます。町内の子どもたちを見ていると、大人しい素直な子が多いのですが、自分から積極的に発言するような子は少ないと見受けられます。ですので、子どもたちがいろいろ学習した事を「発表の場」という事で、例えば佐田岬半島ミュージアムにガイドという形で、子どもや若手の方、それ以外の町民の方とか、その土地の「住人」の方の色々なバリエーションのある方で、ご紹介できるような場があればいいなと思います。伊方町の子どもたちを見ていて、少しおとなし過ぎる印象がありますので、提案させていただきます。

展示全部は大変かもしれませんが、例えば祭りで踊った子どもをピックアップして、お祭りのところを担当してみたりして、発信力のある子どもたちを育てたいという思いがあります。

また、そういう事をアピールしていくと、ちょっと変わったミュージアムというか、観光も含めた話題作りなるのではと思います。

○阿部教育委員会事務局長

ミュージアムガイドという仕組み自体は今でもありますので、そこに行天委員がおっしゃるような、実際にお祭りに参加した子どもに、体験談を生声で説明してもらえるような取り組みはよいと思います。いいアイデアをいただきました。

○中井教育長

せっかくの提案ですし、参加希望をとって見て、子ども達にそういう機会を与え

てみるのもよいと思います。中学生は忙しいと思いますが、希望する子がいれば、やるのもよい経験になると思います。

○道元教育委員

今の段階で私を含め 11、12 人くらいのミュージアムガイドがいます。我々は希望を出して館内のガイドをやっていますが、現在、三崎高校生にも入ってもらっており、これを徐々に広げていこうとしています。先日、CATV で放送されましたが、小学生の町内見学では、役場内は学芸員が案内していましたが、ミュージアムでは、ミュージアムガイドのメンバーで九町小学校の現役の先生が、館内のガイドを受け持ってくれました。それを見ていたら町内の学校の先生も異動はあるにしても、町内でずっと仕事をされる先生が多いので、そういう方を徐々に増やしていきたいところではあります。

町内めぐりの様な部分でも、色々な人が関わられるようにしたいです。

それから SNS でデジタル博物館を展開していますが、学芸員も 20 年のキャリアがあるので、ミュージアムの資料についても、デジタルのデータベースを作っていくてほしいなと思います。

○ミュージアム 高嶋副館長

かなり資料も溜まっていますし、デジタル化はやります。

○道元教育委員

最近、佐田岬トレイルでガイドをする事が始まりまして、私は今月に入って、二階建ての観光バスを 2 回、灯台見学ツアーを 2 回案内しました。11 月 1 日に船でやってくる方は 1 日案内する予定ですが、参加者からは、今度、知り合いとか友達、一緒に歩いている人たちとまた一緒に行きたいと言われまして、ガイドの要望が広がってきています。あと、必要な車を回してあげるサービスとか、交通情報みたいな部分が、これから必要になっていくのではとガイドをしていて思いました。

○中井教育長

先ほどの色々なデータが集まるというところで、アーカイブ化するという構想を持っております。

○高門町長

ミュージアムの入口かホールあたりに、デジタルサイネージを置いて資料の写真等を動画でも映していくっていう事もできると思います。

○ミュージアム 高嶋副館長

法律も変わって博物館もデジタルアーカイブを作らなければいけなくなったので、積極的に取り組んでいるところです。

○西村教育委員

この「伊方町の教育関係支援制度等」という資料を見て、伊方町は本当に手厚いなと思いました。町外の方からは伊方町はすごいねと、本当にいろいろしてもらっているでしょう、とよく言ってもらいます。中学校の部活動の試合に対しても、他

の学校は親が送迎をしていますが、伊方町は毎回立派なバスが来るので、うらやましいと言われていました。

それから、この障害児放課後デイサービスの案が出たという事は本当にうれしいです。去年のこの会議の後、ピップスお話し会に行った際、ある保護者から放課後デイが欲しいという希望があり、立ち上げてほしいという会も作っているという話を聞きました。

また、来年1年生に入る保護者の方が、今まで八幡浜市の児童発達支援センター「巣立ち」に行っていたが、放課後デイはないので大洲の白滝まで行かなければならず大変だから、伊方町で作ってほしいという声を、数日前にもまた耳にしたので、今年もこの場で提案したいと思っていました。この資料に「来年度夏休み前の運営開始を目標に進めています」と書かれているので、本当にうれしいです。

保育所の運動会で、小学1年生が走るときに支援学級の子が一生懸命走ってました。すると保育所の子たちが「〇〇ちゃん頑張れ」と応援していました。子どもたちから自然とその声が出る事がすばらしくて、伊方町は本当に心の教育がしっかりとできているな、と感動しました。

放課後デイサービスでは、学校、家庭ではできないことが、色々経験できると思います。そして今度、川永田の方に障がい者のグループホームもできるということで、すごく保護者の方にとっては、明るいニュースだなと感じました。

○道元教育委員

普段から思っているのですが、少子化対策というか移住定住について、全国的に盛んにやっていますが、私たちの時代の人間からすると、代々その家に跡取りがいる、という形ですと家が受け継がれてきたと思うんです。今はもう子どもは自由に自分たちの生活をしてほしいという流れになっていますが、ふるさとで子育てをしませんかという、アプローチが欲しいと思います。

結婚して子どもができたらず家が欲しい、車が欲しい、その準備ができたらず子どもの教育、となりますが、その最初の家が欲しいという部分で、自分の田舎に家なり土地なりがあるのなら、その部分で行政がサポートをして、田舎に帰って子育てをしてほしいと思います。都会はそれなりに給料もいいかもしれませんが生活費等を差し引けば、実生活の分の費用は余り変わらないのではないかと思います。今は、都会で教育を受けるにしても、地方で教育を受けるにしてもそれほど差はありませんし、どんどん自分のふるさとに帰ってほしいと強く思います。

学校に行く時間が長いと言いますが、私たちの世代の感覚とは全然合わなくて、今の親の世代が子どもの頃にどのくらい通学時間がかかっていたかということ、随分差が出てきていると思います。アンケートにもありましたが、通学時間が1時間を過ぎたら子どもがかわいそうという意見も結構あるのですが、僕らの世代や今の親の世代は徒歩で1時間以上かかっていたわけですから、その辺に親の感覚みたいなものを反映していけたらいいなと思っています。

だから最近は「新しい土地に子どもを連れて住みませんか」というよりは、「自分のふるさとに帰って子育てしませんか」という提案ができたらずと思っています。

○高門町長

そういう情報発信を考えております。

○道元教育委員

田舎に帰れば土地もたくさんあるし、別に同居じゃなくても、敷地内に別の家を建てればいいし、そこに少し補助が出ればいいかと思います。

○高門町長

新築改築費用の補助はありますが、Uターン者に対する補助はないですね。

○道元教育委員

空き家もたくさんあり、自分の家なのに帰ってきていない人も多いと思うので、そちらを提唱してあげたらいいと思います。

○高門町長

この前、農業後継者と意見交換をしたのですが、古い家を買ってそれを壊すための費用の支援も何か考えてほしいという意見がありまして、何かできないか今考えているところです。更地なら家を建てようと思うけど、古い家を買って壊して建てるとなると大変だからという事です。

その他、せっかくですので、この際何でも言ってください。

○行天教育委員

先日、テレビを見ていたら、室戸市に全国募集して十数人単位で漁師をやる、サラリーマン漁師というものがありました。先ほど家の事がありましたが、やはり働く場がないと住めないという事もあります。この佐田岬に置き換えてみると、みかん栽培等の一次産業はあるのですが、サラリーマンの様な固定給の職があると、住みやすいのかなとも思いました。室戸市では、その募集に応募してくる方が、転職や新規で転入しています。朝は早いのですが終わりも早いので、子どもとの時間も育児もできるという感じで、非常にうまくいっている例でした。伊方町でも、サラリーマンみかん農家ではないのですが、何かそういう職はないでしょうか。

○高門町長

ニューズや法人の農家は普通にサラリーマンとしてやっていますが、漁業はないので、珍しいのですかね。

○行天教育委員

それから、一つの職業だけじゃなくて、二つ三つの職業を持っています、というところもあります。例えば、閑散期は役場の職員として役場の仕事をしながら、みかんが忙しいときは農業をしたりという事はできないでしょうか。今はもう一つの仕事じゃなくて二つ三つの仕事をしている人もいます。事例では三つか四つぐらいの職業から二つ選べるみたいな感じで、カフェと林業をやる等、色々な方がいました。そういうハイブリッドじゃないけど、自分の適性の職業を二つぐらい選んで、やるような働き方のいい例を見たので、これを伊方町に加えた場合、どういうふうにビジョンができるかなと思いました。

○高門町長

私もあれを見て検討はしました。伊方でも取り入れるべきか、ということで何社

かは、手を挙げてもらったところがあるのですが、結局今のところ具体化はしていません。

○道元教育委員

繰り返しのようになります。私が子どもの時代は、父は冬になれば神戸に杜氏に行っていました。夏に海産物を採れば、それを干したり加工したりして、昔の人は相当副業をやりながら、1年の生計をどうやって立てようかと考えていた時代でした。今の時代の人たちもそういう状況に追われてきている、サラリーマン1本だけで生活できるという時代ではなくなっているのかと思います。どんどんそういう提案をしていくのは、一つの手段かもしれません。

マルシェやキッチン等を出している人は、本業は他にあって、休みに奥さんがケーキを焼くなどという形で展開しています。

○高門町長

再度、検討してみます。

○行天教育委員

まずはどんな仕事があり、何が人手不足なのかという事などを調査し、仕事の時期や性質等から、組み合わせを提案型にして、1年間でこれぐらいの給料はもらえますというものがあれば、伊方町に行ってやってみようかなという気持ちになるのではと思います。

○濱松副町長

茨城県の境町というところでは、ふるさと納税と紐づけた組織をつくって、売り先はふるさと納税の返礼品にしています。マルチな働き方で、副業じゃない複数の「複業」なんです。そういう働き方を組織の中で提案をしていくとか、そういうことはされていたように思いますので、先行事例を参考に考えてみるというのはいいいですね。

ヒジキですけれども、水産業のほうがそういう事は考えられるかなという気はします。その売り先は、ふるさと納税で売っていくというところですかね。

○高門町長

伊方のふるさと納税額は、4、5年前までは数100万円でした。これが外部委託を始めてから、去年が1億弱に、今年は1億円は超えそうな感じですけど、先ほどの境町は60億、八幡浜市は19億円ですからこれはもっと伸ばしていきたいなと思っています。

○行天教育委員

専門的な仕事でも、少し教わればできるような仕事、ある程度の知識があればできるような仕事を引っ張ってくるとか、複業の仕事の中に、そういうのも目指してやると、効率よくできるという事をテレビでやっていました。

例えば橋の老朽化があって、老朽化している橋を直すために、どこが壊れているかは専門家がやらないといけないのですが、現場の写真を撮ってきたり、データの編集をしたりする仕事を引っ張ってくる。

仕事場がないとやはり人は増えないし、子どもも増えないかなと思います。

○道元教育委員

最近、瀬戸の風の丘パークの展望台に行ったのですが、現在、風車が無くなっており、風車が無い景色も新鮮でいいなあと思いました。その一画で子どもを連れてきて遊ばせたら、何も無いけど逆に何かいい場所になるのではないかと思います。下に駐車場があってトイレもあるし、子どもが自由に遊べるような、広大な空間は本当に大事ななど、あんな立地条件を持っている場所はないなと思いました。

○阿部職務代理

結局課題は、働くこととか、子どもとか、過疎をどうするのかという事だと思います。

○高門町長

今度開始するコールセンターは雇用目標が30人です。結構、時間帯を自由に選んで働けるようです。その会社が同じく四万十市に運営しているコールセンターを視察に行きましたが、若い子がUターンで帰ってきていたので、伊方町でも期待はしています。

○阿部職務代理

道元委員が言われたように、縁もゆかりもない人が来てくれるのはありがたいことなのですが、子育てした人たちがうちの子を呼び戻そうか、孫を呼び戻そうか、ここで生まれ育った子どもたちを、という意識にならなければいけません。新たに他所から来ようとしている人は、日本中、伊方みたいな町があるわけで、選択肢が多いわけですから。

その中でも伊方町は、何とかして人口減少を止めようと一生懸命やっているけどもなかなか難しい。じゃあ先進事例みたいなことがやれるかと言えば、これもできない事があります。その様な状況で、我々を含めたここで生まれ育った者が何とかするしかないと思います。「我が子にこんな苦勞させたら」と言う人がいますが、それは違うと私は思います。

親が楽しそうにしていたら、子どもはこんな面白い父ちゃんになりたいなと絶対思うような気がします。それができないようになった時代から、どこもこうなのでしょう。

○西村教育委員

職務代理さんが学校訪問のときに、「もう私は8年目で最後です。これだけは言いたい、ふるさとを愛する子どもを育ててください」とおっしゃるのですが、まさに、そこじゃないかなと思います。

私も県外の大学に行って、その後も八幡浜市や色々なところに住んでいましたが、やはり伊方町に住みたいと思って戻ってきました。本当に小さな頃から「伊方町大好き」という気持ちを育てていくのがやはり大事かと思います。

○道元教育委員

その部分からいくと、三崎高校の取組はすごく発信できていて、「三崎高校に行

きたいな」と思わせるようなプレゼンを毎回しているので、あれを町が取り入れれば面白いかもしれません。

○藤川教育委員

町外に出て、伊方町の現状がわかってない若手世代も多いと思います。例えば、夏休みにお試しというか、カムバックスクールの様な体験があると「今こういう形なのか」と気付くかもしれません。伊方町は学校の環境は本当に整っていると思います。そういうところも見てもらえるし、そういう機会があると、呼び水になるのではないかと感じます。今の状況を知らない若い子も結構いるのではないかと思います。

○濱松副町長

町長が日本有数の子育て支援の町ということで、子育て支援策を出していて、これはもう県下一だと思えます。それをどうやって情報発信して伝えるかというところですね。

○阿部職務代理

副町長が言われるように、今、こんな子育て支援が充実したところは他にありません。意外とそれを知らない人、利用しない人が多いです。チャイルドシートも、あれだけの補助があるのにチャイルドシートを補助なしで買っている人がいたりします。そういうこともあるので、やはりアピールが行き届かないのかと思います。

○高門町長

ちょっと役場に聞いてくれればいいのですが、役場に来るのは敷居が高いのでしょうか。

○阿部職務代理

地域の説明会で、教育委員会は敷居が高いと言われました。それと一緒に行政も問い合わせにくいのかなと思います。ちゃんと問い合わせたら支援があるのですが、その辺りのアピールも考えないといけないのかなと。

○中井教育長

伊方町の広報に出しても小さな字は見えない、防災無線で放送しても放送はよく聞こえない、ホームページに出しても高齢者は見ない、複合的に取り組んでいるのですが、どうアピールするかというのはなかなか難しい。

○西村教育委員

それでいうとやはりクチコミですよ。人と人との付き合いで、ママ友同士でこういうのがあるよ、というのが広まりやすいです。

○中井教育長

若い人はそれで広がっていきませんが、高齢者には難しい。行政に何か要望があったときにまずここに電話してください、そうしたら、その窓口で紹介しますよという係があってもいいですね。

○道元教育委員

学校がなくなったら廃校になってしまいます。地元の人たちが学校の跡地を何かに使おうにも、何から初めていいのかわからないし、責任者はいないという形になっているので、学校の機能が終わったら次の所管はここという窓口があるといいですよ。みんな「学校あるのに」「建物もあるのに」と思っている人ばかりで、その先に全然進めてないのです。

○行天教育委員

先日、テレビで高知県の学校跡地利用についてやっていたのですが、宿泊施設プラス住民が使えるコンビニがありました。どうしても買物弱者があるので、いいなと思いました。

○中井教育長

そういうものをどんどん作り上げていく、地域のリーダーの養成も大事だと思います。それができなければ、どうしても行政主導になる。行政主導で、本当に地域にマッチしているのか、難しいことだと思います。

教育の観点からですが、社会教育においてそういう地域リーダーの育成という事は非常に大事だと思います。引っ張っていけるような人がいたらまた違うと思います。

○阿部職務代理

「こんな事あるから使えませんか」ではなくて「こんな事やりたいから何かありませんか」というふうに問い合わせがあって、行政が支援するのが本当はベスト。公助は最後までまずは自助。自分たちが何とかしようということで、それでもどうにもならないので、何か支援はないですかと言われたら、行政もバックアップのしがいがある。まず一緒に汗をかく、話はそれからだと思います。

○濱松副町長

町長の非常に大きな政策の一つに集落のグループホーム化があります。これは集会所を拠点とした高齢者福祉の構想で、集会所を拠点にというのは一つ考えないといけないと思います。集会所に行けば高齢者が集まって楽しむ場がある、あるいは必要な情報が得られる、そしてそこを通じて、町のほうにも要望できるような仕組みがある。そういうところをだんだん整えて行く必要があります。一人一人各戸訪問するわけにはいかないのです、今後、地区の集会所をそういう拠点にしていけないといけません。それで今、交通手段をどうするかとか、福祉をどうするかとか、集会所で共に食事をする共食をどうしていくのかとか、災害時は、顔認証を使って、誰が避難してきたのか瞬時に分かる、健康状態等もそのデータを呼び出せば分かる、そういう仕組みを今つくっています。

○高門町長

これも肝になるのは、役場の職員が全部行って対応する事はできないので、各地域で、どうやって引っ張ってくれる人をつかまえるかというところです。

○道元教育委員

手前味噌ですが、うちの集落は集会所を使って、月曜日は書道教室、水曜木曜はお針子、月に1回ペースぐらいで奉仕活動をやっているんで、既に集会所を利用しています。管理もそれを使った人は掃除をしてという形を取っています。それで、皆さんもお互いの健康状態はわかっていますし、防災の部分でも、誰が誰の担当をするのかという事も全部決めています。住民が集会所等に頻りに集まれるような機会を各集落ごとに作ってれば、問題はほとんど解消できるので、さっきの副町長の言葉を返すようで悪いのですが、顔認証はあまり必要ないですね。うちの集落は本当に皆さん活発なので、どんどん見に来てほしいです。

○高門町長

ほかの集落はどんな感じですか。

○阿部職務代理

一生懸命取り組む人は取り組むのですが、区長になった人は、区長じゃなくなったら行事に来なくなります。そこが問題で、一度経験した人はやっぱり身近な問題として大事なことから、来年も何かこういう機会があったら、来ようという気になってくれないと、結局はそのときの区長だけで終わってしまう。

○道元教育委員

うちの集落にはリーダー的存在はいるのですが、リーダーではありません。みんなが毎週その日になったら自然と集まってくるという形ができています。地元に住んでいる人たちが楽しめるようなものが見つかるという感じになります。

毎年8月に、ビクターズハウスで1か月、自分たちの作品展の様な事を行っているのですが、そういう目標がちゃんとあるので、もう15年以上は続いています。

○阿部職務代理

リーダーになる人は決められた役職ではなく、いわゆる昔でいう音頭取りが1人いると、全然また違ってくるのかなと思います。そういう人は批判されがちだけど、それが当たり前と受け止めて、気にせずに来てくれる人がいてこそだと思います。

先ほど道元委員が言われましたが、昔は本当に朝早く起きて、時間をかけて学校へ歩いて行っていたんですが、今は車やバスで単語帳を開いて勉強もできる。それはそれで構わないのですが、昔はこうしていたと言うと、今それを言ってもだめと言われます。でも、そういう先人の苦勞を理解した上で、話し合いに乗ってもらわないといけないと私は思います。昔はこんな苦勞していたのだから、苦勞しろ、我慢しろとは言いませんが、こんな苦勞していたということを、私は言っていないし、聞く義務はあるような気がします。

○高門町長

そういう姿をミュージアムで出すとか、昔の通学の格好をして通学路を歩いてみようというツアーとかいいかもしれませんね。

○道元教育委員

やってもらったらトレイルに使えるので、ぜひお願いしたいです。

○高門町長

結構、雑談みたいなこういう中で面白いアイデアが出るんですよ。

ここで少しこれから取り組む課題を二つ三つ挙げると、まず選果場の統合です。2、3年後ぐらいに伊方と保内の選果場が統合します。今年から、統一マークで出すようです。保内の選果場を取り壊して建て替えて選果機を入れる。それをどうスムーズに進めるかという事が一つの大きな課題。

それから消防署について、三瓶の管轄が西予市に移ります。そのため川永田に分署を新設する事と、現在の第一分署を三崎支所付近に移転するという案を現在検討しています。

○阿部職務代理

保内の第二分署がもし津波とか緊急で使えないときには給食センターが一時的な機能を兼ねる、という内容で何年か前に協定を結んだことがありますね。災害時にどこかに分署の機能を移す、という時には伊方の給食センターでというように委員会と提携しました。

○三好中央公民館長

年に1回ぐらい訓練等を、分署が来てやっています。

○道元教育委員

自然災害なので、なかなか津波の想定は難しいのですが、再編計画案説明会のときに、津波が来たらどうするんだ、という質問もありました。確かに心配な面はあります。災害や防災について、それに備えた知識や理解を一人一人が持てるよう町全体で進めていく必要があると思います。

○中井教育長

8メートル、10メートルの津波が学校を襲うことも想定される。そういう心配がやはり保護者としてはあると思います。

学校では防災・減災教育やそれに関する訓練等をかなりやっていますが、地域防災に携わる方たちは別にして、地域の皆さんは避難訓練などはやっているけれども、防災や減災教育については、十分ではないという声を聴きます。

社会教育の分野でもありますが、やはり住民に対する防災・減災教育を充実する必要があります。町全体で進めていく課題だと考えています。

○藤川教育委員

保護者や子どもたちの不安があるのなら、学校再編の前に、3校なり2校なりの合同の訓練をすることも大切だと思います。

○中井教育長

そういう事もあわせて、来年度はある程度予算を組んで瀬戸地域、三崎地域、伊方地域で防災関係の講演会などをやっていければと思います。自助共助と言いますが自助共助をやる人が、よく理解しておくことが最も大切です。課題の一つかと思っています。

○藤川教育委員

これまでも、こういうフリートークの中から拾っていただき、色々な改善をしていただいているという事は感じており、本当にありがたいことだと思います。特に、複式に対応する支援は、1人入ると先生も子どもたちも、本当にどれだけ楽になったかという事を言うてくださるので、ありがたいと思います。

この規模だと、県の配属とか難しいですよね。例えば、小学校の英語の専科の先生を、退職された先生とかに声かけするとかは考えてないでしょうか。そうすれば先生も空き時間もでき負担が減ると思いますけれど。

○中井教育長

これについては、町雇用の職員では授業を指導する権限がありません。やるとしたらTT（ティーム・ティーチング）で行うような形ですが、教員がいっしょに行うのが前提なので、負担軽減に多少はつながるけれども時間的な拘束は変わらない、ということになります。

○藤川教育委員

学校訪問に行っても、英語の授業をする先生がある程度決まっているので、小学校では先生の負担になっているのではと思いました。今の小学校の先生は免許を持たず教えているわけですから、そういう専科の先生を町で雇えたら、先生の負担も減るし、子どもたちの学力もアップするのではないかと考えました。

○中井教育長

今の小学校の教員は、英語科についてのカリキュラムは組まれていなかったのので、その対応は難しい。文部科学省では小学校の専科制をとる方向になっていますが、伊方町は、英語免許を持っている小学校の先生がほとんどいません。英語の免許を持った教員、専科の加配を要望していきたいと思います。

5. 閉会

○濱松副町長

この様なざっくばらんな意見交換は、多岐にわたる内容が多く、非常にいいなというふうに思っております。参考になることが結構あってメモをつけているんですが、こういったところで「しあわせ感じる伊方町」という、住んでいいな、よかったな、長く住み続けたいなというような、まちづくりに皆さんと一緒に取り組んでいけたらと思っております。

また教育の充実も当然図っていかねばならないと思っておりますのでよろしくお願いを申し上げまして、簡単でございますが閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。